

江戸の〈知〉

蔵書の種々相を考える

神作研一

今年度の「調査収集シンポジウム」は、基幹研究「近世における蔵書形成と文芸享受」（代表・大高洋司教授）の成果報告として実施された【二〇一四年五月二十九日（木）】。コーディネーターは神作研一。わたくしに題を「江戸の〈知〉―蔵書の種々相を考える―」と定めて、四名のバネリストに登壇していただいた。

1. 大庭卓也氏（久留米大学）「佐賀鹿島藩蔵書に見える漢文学資料」

2. 盛田帝子氏（大手前大学）「二条派から古学派へ―堂上歌学の変容と地方への伝播―」

3. 伊藤善隆氏（湘北短期大学）「俳諧資料の特性―「近世における蔵書形成と文芸享受」という視点から―」

4. 井上泰至氏（防衛大学校）「蔵書調査から見えてくる文芸享受の風景―身分社会における自己存在証明の視点から―」

本誌への寄稿に際して、大庭氏のみタイトルを「木門の儒学者たちの文学熱と鍋島直郷」と改められたが、内容の大きな変更はない。いま各

稿の要点を摘記しよう。

まず大庭氏【祐徳稲荷神社チーム】は、鹿島鍋島藩第六代藩主鍋島直郷の漢学の師である河口静斎（木下順庵門）の「静斎隨筆」（「甘雨亭叢書」別集第三）と「乗筆録」（祐徳稲荷博物館中川文庫蔵）に寄り添って静斎の文学観を洗い出し、それが他の木門の儒者たちの思考と共通し木門の文学熱を伝えたものであることを指摘、そうした静斎の文学観が藩主鍋島直郷の意識に大きく作用していた可能性を説いた。

ついで盛田氏【新日吉神宮蘆庵文庫チーム・八戸市立図書館南部家旧蔵本チーム】は、妙法院宮真仁法親王のサロンをターゲットとして、近世中後期の京都における契沖仮名遣いの浸透の様子を追究することによって、時代が徐々に二条派から古学派へと変容するさまを具体的に描出、さらに手銭家チームの研究成果をも踏まえて、古学が地方へと伝播していった象徴的な事例を併せて紹介した。

次の伊藤氏【八戸市立図書館南部家旧蔵本チーム・富加町郷土資料館チーム・手銭家チーム】は、俳諧資料の多様性（俳書／点取・月次俳諧

資料／筆跡資料／俳諧一枚摺や文台などのその他」と实在資料の偏向性を確認した上で、真田宝物館・八戸市立図書館・富加町郷土資料館・手銭記念館、計四箇所の所蔵先の特徴を概述、「俳諧」という文芸の特異性を、蔵書の現状に即して炙り出した。

最後に井上氏【八戸市立図書館南部家旧蔵本チーム・矢口丹波記念文庫チーム】は、写本で流通している軍書（とその延長線上にある実録）を対象に据えて、その種々の特徴を、造本・蔵書・読書と身分的位相という観点に基づいて報告した。太平の世にあつてなぜ軍書が、それも写本で伝襲されたのか——、近世における書物というものの役割を、より大きな視座で考えさせる。

詳細は以下の各氏稿につかれないが、このシンポを通して、身分階層とジャンル、書物の集積と管理伝流の様態、中央から地方への文化の伝播、ひいては蔵書とは何かということを根底から考え、学問・教養・娯楽を自在に往還した江戸の〈知〉の一端を炙り出したいと願った。

因みに、「蔵書」の語には二つの語義がある。一つは「貯蔵した書籍」の謂いで、早く『唐書』の藝文志に現れる。もう一つは「書をたくわえる」の謂いで、『莊子』の天道篇に出る〈漢語大詞典・大漢和辞典ほか〉。大槻文彦の『言海』（一八八九刊）には「己が所蔵ノ書物。蔵本」と記述され、『日本国語大辞典（第二版）』には用例の第一に『落葉集』（二五九八）が掲出されている。『角川古語大辞典』に「蔵書」が未立項なのは意外だったが、ともあれ今ここには、『日本古典籍書誌学辞典』の「蔵書」の項（長友千代治執筆）の全文を引いてみよう。

所有している書物。所持本。蔵本。まだ所有していない本を未蔵書という。蔵書のある人を蔵書家という。収蔵する舎を文庫という。

金沢文庫、紅葉山文庫、林崎文庫、賀茂三手文庫、西荘文庫、阿波国文庫など有名であるが、それぞれ成立によって蔵書内容に特色がある。大は万巻以上、小は数十部の蔵書もある。蔵書は分類がなされ、蔵書印が押され、蔵書票が貼られ、また蔵書目録が作られたりするのが普通である。蔵書が分散してしまった場合、旧蔵書という。

そもそも、この『日本古典籍書誌学辞典』には全部で三四〇〇項目が立てられているのだが、そのうちの約一八％にあたる六二三項目が「蔵書・蔵書家」に関わるものである。書籍の継承と伝流——〈知〉のダイナミズム——に、いかに「蔵書」が深く関わってきたかが思量される。

さてところで、近年は、主に歴史学の領域で蔵書研究が精力的に推進されてきた。また、古典学・書誌学においても禁裏本や書籍文化史の追究が深まっており、さらに書物リテラシー史の領域も開拓されてきた。古典的なものとして、小野則秋の『日本文庫史研究』上・下（臨川書店、改訂新版一九八八。*原刊一九四四）を挙げうるが、それらをざっと一覧してみれば次の通り。

○『旧華族家史料所在調査報告書』学習院大学史料館編刊（一九九三）

○『禁裏・公家文庫研究』第一～五輯（十）（田島公編、思文閣出版、二〇〇三～一五）

- 【禁裏本と古典学】吉岡眞之・小川剛生編（塙書房、二〇〇九）
 - 【禁裏本歌書の蔵書史的研究】酒井茂幸（思文閣出版、二〇〇九）
 - 「堂上から地下へ―典籍の流出・提供・活用」浅田徹（『調査研究報告』三二号、二〇一二・三）
 - 【中世人のたからもの―蔵があらわす権力と富】五味文彦ほか編（高志書院、二〇一一）
 - 【古典籍が語る―書物の文化史】山本信吉（八木書店、二〇〇四）
 - 【江戸の蔵書家たち】岡村敬二（講談社選書メチエ、一九九六）
 - 【書籍文化史】一―一六号（十）（鈴木俊幸編刊、二〇〇〇―一五）
 - 【書物の日米関係 リテラシー史に向けて】和田敦彦（新曜社、二〇〇七）
 - 【書物学】一―四号（十）（勉誠出版、二〇一四）
- 「個」は「全体」の中で初めてその存在意義が明確になるものだから、蔵書の全体像やその構築史を知ることが極めて重要な問題だと思う。蔵書を丸ごと一つの視座に収める時、どのような風景が広がるのか―。多角的な蔵書研究の、いっそうの進展が望まれる。
- なお、わたくしどもの基幹研究の成果としては、既に一昨年の「調査収集シンポジウム」において、三名のパネリストによる中間報告がなされた（二〇一二年六月七日）。

○加藤弓枝氏（豊田高専）「非蔵人の文学宮為―蘆庵文庫蔵書を通して―」

○川平敏文氏（九州大学）「肥前鹿島藩主鍋島家の神道書とその周辺―新出「神道伝授秘函」を中心に―」

○田中則雄氏（鳥根大学）「手銭家蔵書と出雲の文芸活動」

それらは、大高洋司代表による概要報告を添えて、「調査研究報告」三三号（二〇一三・三）に掲載されている。先のシンポは文庫（蔵書）ごとにその特質を捕捉しようとしたものであり、今般のシンポはジャンルごとにその文藝的特徴を析出しようとしたもの。モノ（蔵書）に即して文化史を立てるならば、そこには従来の、作品に即した文学史とは別の様相が出現するに違いない。

―わたくし自身も、シンポ二種の成果をかれこれ相互に繰り返し参照することで、本基幹研究の問題点を複層的に理解し、その可能性をさらに考えるしるべとしたい。

◆基幹研究「近世における蔵書形成と文芸享受」の詳細は次の通り。

【研究期間】二〇一一―一三年度

【研究組織】代表…大高洋司

（館内教員）入口敦志・神作研一・山本和明

（機関研究員）佐藤温↓高松亮太

（RA）紅林健志・網野可苗

【研究分担者】芦田耕一・飯倉洋一・伊藤善隆・井上敏幸・井上

泰至・大谷俊太・大谷節子・大庭卓也・小川陽子・勝又基・加藤弓枝・金田房子・亀井森・川平敏文・菊池庸介・久保田啓一・倉島利仁・黒石陽子・進藤康子・田中則雄・中川豊・野本瑠美・二又淳・原豊二・菱岡憲司・森澤多美子・盛田帝子・山崎真克・若木太一

【研究の概要】これまで国文研が調査収集の対象としてきた所蔵先のうち、現在調査収集がいったん終了したところ、またはヤマを越えたところについて、江戸時代における特徴的な個人蔵書家をモデルとして取り上げ、近世における蔵書形成の「類型」を押さえるとともに、これに収まりきらない「個性」にあたる部分の内実を、文学研究の立場から掘り下げ、広汎で多様な文芸享受の実態を把握することを目的とする。

【調査対象箇所】

(A) 八戸市立図書館南部家旧蔵本

*大名(二二〇〇点) / 漢籍・歌書・読本

(B) 矢口丹波記念文庫(高崎市)

*神官(矢口家〈八幡八幡神社〉)(二六〇〇点) / 書写

(C) 三島市郷土資料館勝俣文庫

*豪商(勝俣家)(五〇〇〇冊) / 俳書

(D) 富加町郷土資料館(岐阜県)

*豪商(平井家)(二二〇〇点) / 和歌添削資料 / 歳旦帖

(E) 新日吉神宮蘆庵文庫(京都市)

*神官(藤島家)(二六〇〇点) / 非蔵人文書・小沢蘆庵
(F) 手銭家(出雲市大社町)

*豪商(手銭家)(六五〇点) / 歌書・俳書

(G) 祐徳稻荷神社(佐賀県鹿島市)

*大名(中川文庫二五〇〇冊) / 漢籍・神道書・歌書

【参考】

大高洋司「〈研究ノート〉基幹研究「近世における蔵書形成と文芸享受」について」
〔国文研ニュース〕二三号、二〇一一・五

〔補記〕研究期間終了後の今年度にも、次のような催しが(F)手銭家のメンバー(チームリーダーは田中則雄 島根大学教授)によって実施された。

【蔵の美術館手銭記念館】

◇特別企画展「江戸力 手銭家蔵書から見る出雲の文芸」(一〇月

四日～二月二日)

◇連続講座「手銭家歴代の和歌活動―歌壇史上の意義を中心に―」

久保田啓一(一〇月二三日)

・江戸時代末期の大社歌壇―芦田耕一(十一月一五

日)

・俳諧史の中の出雲・大社・手銭家―伊藤善隆(一二

月二三日)

◇シンポジウム「手銭家蔵書から見る出雲の文芸」(二月一四日)

基調講演「手銭家蔵書と出雲の文芸活動」田中則雄

パネルディスカッション 久保田啓一・芦田耕一・伊藤善隆・

田中則雄(司会)

地域に根ざした、一般の方々への誠実な取り組みとして特記しておくとともに、メンバー各位のひとかたならぬ御尽力に深く感謝したい。